



「レ・ミゼラブル」

本編の原作小説「レ・ミゼラブル」の著者ビクトル・ユーゴーの父は無神論者で、母は敬虔なカトリック信者でした。幼少期にはカトリック信仰を受け入れはしたものの、やがて教会に失望し、最も声高な批判者になりました。後に、聖書的なキリスト教を捨てたと言いう説もあります。

しかし、著者60歳のときに発表された原作は、虐げられている者たちの窮状に苦しみ、厳格な法律と格闘し、勝ち誇る神のあわれみを確信するひとりの人を明らかに描き出しています。

オリジナルは世界43カ国で上映されて大ヒットを記録した名作ミュージカルで、ヒュー・ジャックマン、ラッセル・クロウ、アン・ハサウェイら豪華キャストを迎え映画化したものです。

●ストーリー

場面は、1815年のフランス。ジャン・バルジャン(ヒュー・ジャックマン)は、飢えた子に食べさせるためにパンを盗んだ罪で19年近くを監獄で過ごし仮釈放されたばかり。前科者で仕事も住みかもない彼に、ミリエル司教だけが温かい食事と寝場所を与えてくれた。

バルジャンは、その善意を裏切つて、教会の食器を盗んでしまう。すぐに捕まり連行されるが、驚いたことに司教は「燭台はあげたのだ」と当局者に告げ、おまけに他の燭台も差し



出す。司教はバルジャンの耳にささやく。「お前は、これを使って正直な人間になるのだよ」彼は、そのことばどおり改心し市長にまでなり、工場を経営し、貧者を雇い入れて成功者となる。

ある晩、バルジャンはひん死の女性ファンティース(アン・ハサウェイ)と出会う。彼女は、娘コゼットを養うためその身を売るしかなかった。彼は、ファンティースなきあとコゼットを育てることを誓う。それからの人生は、めまぐるしく変わる危険な状況の中で約束を果たすための戦いだった。バルジャンは、かつての監獄長で警察本部長のジャベール(ラッセル・クロウ)に付け狙われる。なんとかジャベールの手を逃れるが、コゼットは若い娘に成長し、革命家マリウスと恋に落ちる。

パリの路上で革命が勃発する中で、マリウスがそれと知らずにバルジャンをジャベールと引き合わせる場面で本作品は最高潮に達する。

●あわれみかさばきか

ユーゴーの描く人間の悲劇はドラマティックです。

まず、人間の尊厳という問題について人間(レ・ミゼラブル)みじめな人々を苦役、貧困、非人間性に貶める不公平な社会のために何ができるのか? ユーゴーは、究極的にはこの人生の悪を正す神に目を向けます。しかし、この世においては、それは隣人にあわれみの手を伸べる人に見出されません。

ミリエル司教は、盗人バルジャンにふさわしくない恵みをあえて施す。赦しと恵みによって変えられたバルジャンは、数多く

の人に親切を施す人間となる。それは、彼が勇気と正直と自己犠牲の人になったからです。その行いはこの世で報われなくとも、天国では報われる。

しかし、罪人は罰を受けないでよいのか。道徳や法律は守られなくてよいのか。警察本部長のジャベールは、神のあわれみもあがないもない律法を象徴している。ユーゴー作品の文脈には、イエスとパリサイ派の衝突が重なる。もちろん結論としては、あわれみがさばきのうち勝ち、最後に福音が勝利する。

●最後に

19世紀フランスの路上生活の不衛生と退廃がそのままに描かれ、汚いことば、性行為などがあまりに露骨で青少年には適さないところもありますが、すべてのセリフが歌となつているこの作品は、観終わつた後に深い感動と余韻を残すものとなっております。

(評者・テモテ・コール)



2012年 イギリス映画

監督◆トム・フーパー

出演◆ヒュー・ジャックマン、アン・ハサウェイ他

制作◆ワーキング・タイトル・フィルムズ

上映時間 165分 全国各地で上映中